

令和7年9月7日

令和7年度 都川水の里公園・稲作体験講座【第4回】

第4回「稲刈り」には、田植えの時と同じ人数の12組44人の受講者が参加しました。第1回「田植え」の時と同じ人数です。30度を超える残暑厳しい中での作業でしたが、皆さんの結い（協働作業）のおかげと稲刈り機（バインダー）の応援で、11時半には怪我や熱中症もなく、無事に稲刈りを終えることができました。

はじめに、運営事務局から稲の生育状況（出穂から現在まで）と稲刈りの方法、稲刈り道具の歴史や架け干しの種類について説明がありました。その後、田んぼに移動し3班に分かれて、稲刈り作業を始めました。

受講者は、大半が稲刈り体験初めての方です。稲刈り用の鎌で地面から10センチほど上の株元から刈り取り、2～3束ずつ交差するように重ねて近くに置きます。すがい（細い稲縄）や稲わら、麻ひもを使って稲を束ねます。すがいや稲わらで束ねるのは少々こつがあるので、麻ひもを使って束ねる方が多かったようです。麻ひもは、長さ90センチの片方の端に輪を作り、稲を束ねやすくする工夫がしてあります。すがいと麻ひもは事前に300本ずつ用意しました。稲束が緩まないよう堅結びでしっかり結んでもらいました。



端に輪を付けた麻ひも

稲刈りしながら、カエルやドジョウ、カマキリなどを田んぼで見つけては喜ぶ子どもたちの姿が見られました。

束ねた稲を運び、「おだ」まで運び竹竿に架けて干します。架けて終わった稲束の周りに防鳥テープを巡らして、稲刈り収量です。稲の自然乾燥には、地面に直接並べて干す「地干し」と、地上の竹竿などに架けて干す「架け干し」があります。おだ（※）は、竹の棒で2、3脚の支柱（おだあし）を建て、これに竹の竿（おだ木）を載せて作ります。支柱と竿をしっかり結んで固定しないと、稲わらの重みで竹竿が下がってしまいます。

架け干しは、稲架がけ（はざがけ）、稲掛け（いねかけ）、稲架（とうか）など地方により様々な呼び方があります。千葉や茨城では、小田掛け（おだかけ）と呼びます。架け干しおだ架けした稲は、天日と風で自然乾燥して粳の水分を減らし（水分量を20～25%から15%にする）、2週間後の9月21日に脱穀する予定です。



稲刈り作業



同左



稲刈り作業



同左



稲刈り作業



同左



おだを建てる



束ねた稲をおだに架ける



束ねた稲をおだに架ける



おだ架けの前で（1班）



おだ架けの前で（2班）



おだ架けの前で（3班）



稲刈りを終えた田んぼ



同左